

# 1 相対的貧困世帯と親及び子の行動と意識

東京大学社会科学研究所教授 石田 浩

## 1 はじめに

本調査は、日本における貧困の関心が高まる中で、出身家庭の経済状況、特に貧困世帯とそこに育つ子どもの行動と意識の関連について考察することを目的として設計されている。調査の対象として、中学3年生（14-15歳）という年齢を特定化した子どもを想定している点に特徴がある。義務教育最後の学年である子どもにターゲットを当てることにより、学歴分化がはじまる直前の状況を把握することが可能となる。小学校段階ではないので、それまで家庭で育ってきた15年間の家庭環境の影響が蓄積されてきたと考えることができる。さらに、対象となった子どもの保護者にも調査することにより、親子のペアで調査票を合体した分析が可能なことにも特徴がある。出身家庭の経済状況などについて保護者から情報を得ることにより、より正確に把握することができただけでなく、子どもの行動・意識を、親の考え方、意識との関連で捉えることが可能となった。

本章では、子どもが育ってきた世帯の経済状況を親の回答から正確に測定した上で、相対的貧困状態にある世帯を特定化し、相対的貧困世帯とそれ以外の世帯の間でどのような違いや格差があるのかについて検討していく。なお本章では、保護者票の回答者が実の父母、義理の父母である場合に限って分析対象とし、子ども票と合体することで親と子をペアで関連付けて分析している。

## 2 相対的貧困世帯の定義

ある世帯が貧困であるか否かを特定するのは、容易なことでない。本報告書では、厚生労働省が公表している「相対的貧困率」を参照し、世帯の可処分所得を世帯人員数で調整（人数の平方根で割る）した等価可処分所得を推定し、その中央値の半分に満たない所得の世帯を「相対的貧困」にある世帯と定義した（詳しくは、「相対的貧困の定義」の部分参照）。本調査では、世帯の可処分所得（総収入から税金・社会保険などを差し引いた所得）ではなく、「去年1年間の税込の世帯所得」を回答者に質問しているので、世帯総収入から可処分所得を推定した。総収入の回答は、所得の実額ではなく、「100万円未満」「100-200万円未満」「200-250万円未満」など一定の所得幅の選択肢の中から選ぶ形であるため、可処分所得はこのような所得幅を用いて推定することになる。世帯構成ごとに、相対的貧困の基準となる「所得幅カテゴリー」を設定した。相対的貧困線を明確に下回る所得幅のみを相対的貧困と扱っている。以下の分析では、相対的貧困状態にある世帯を「貧困世帯」、そうでない世帯を「非貧困世帯」と呼び区別する。

## 3 貧困世帯と親の属性

はじめに貧困世帯の親の属性について検討する。配偶関係の有無と父親か母親かを区別して、貧困世帯の出現率を計算すると図IV-1-1のようになる。実の父母、義理の父母以外の、祖父母やその他の親族が回答者である場合は分析から除いている。父母ともに配偶者がいないひとり親世帯で出現率が高くなっており、特に母子世帯での出現率は55%と際立っている。つまり母子世帯の回答者のうち半分以上が貧困世帯として分類されていることになる。このことは、母子世帯に特に焦点を当てた分析が必要であることを物語っている。

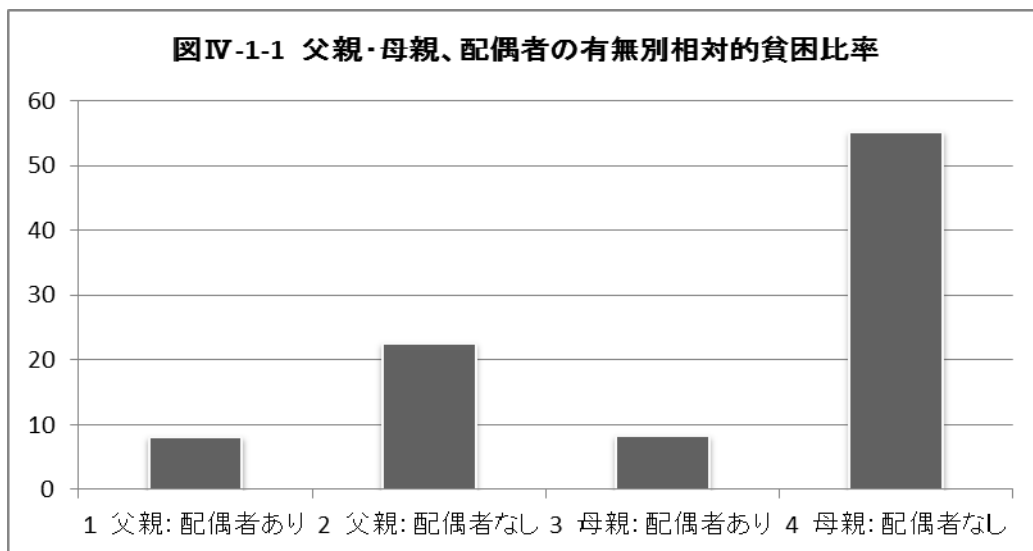
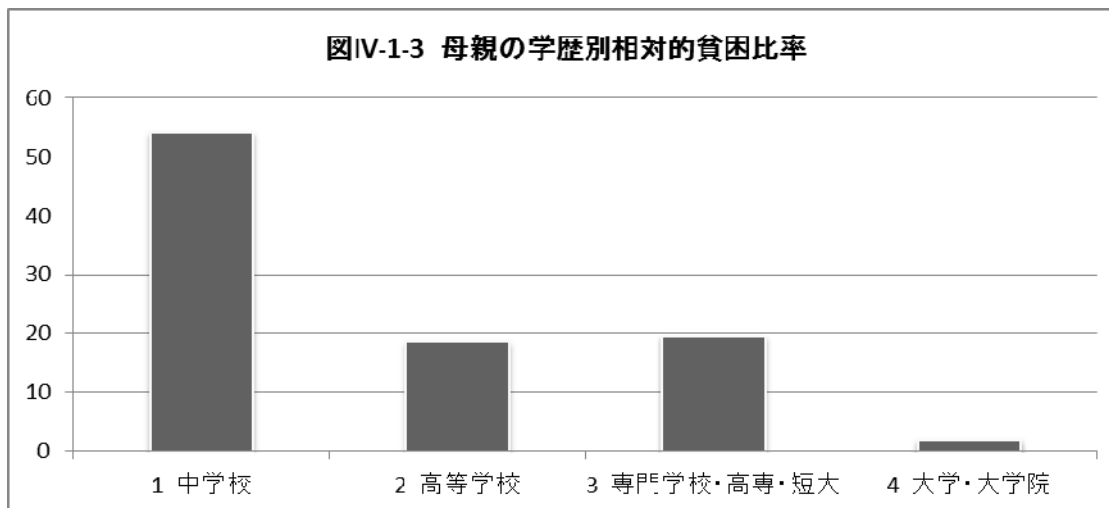
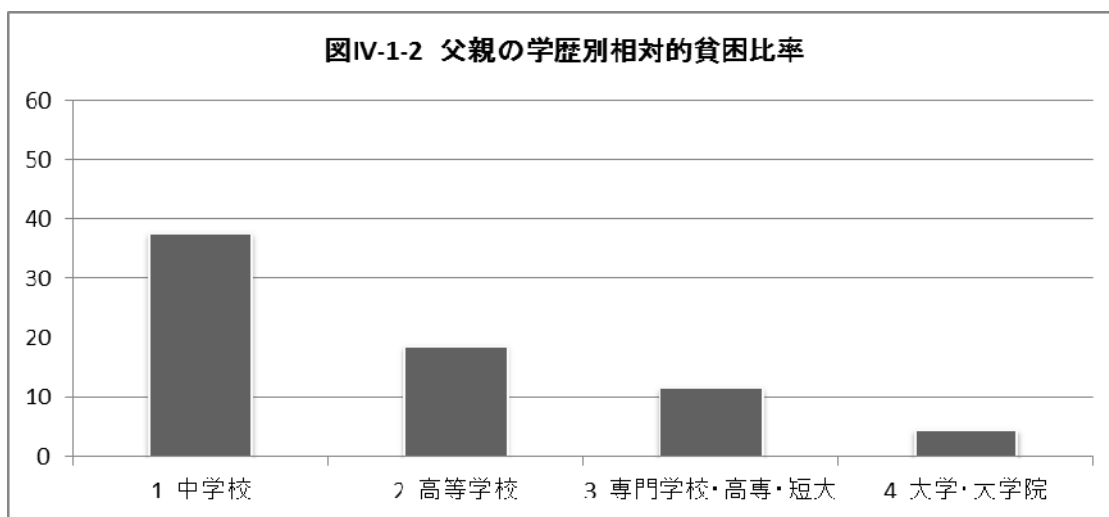


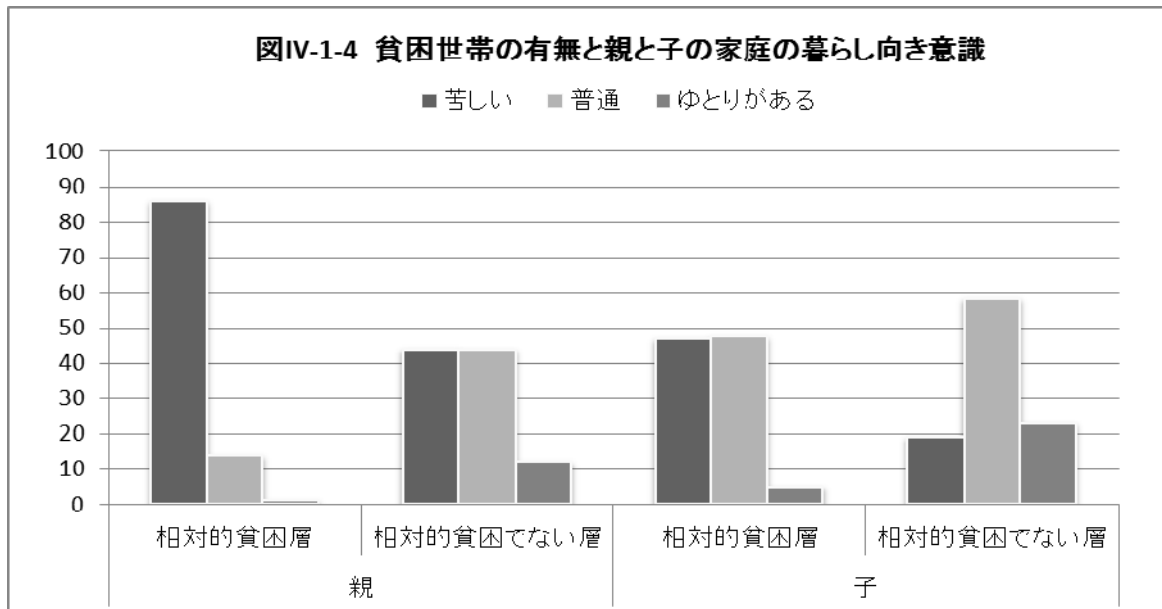
図 IV-1-2 と 3 は、親の学歴別に貧困世帯の出現率を示したものである。親が中卒者の場合には、父親の 38%、母親の 54%が貧困世帯に分類されており、低学歴と貧困の強い相関があることがわかる。



#### 4 貧困世帯の経済状況

次に貧困世帯の置かれている経済状況について検討する。家庭の暮らし向きについての質問の回答をみると、図IV-1-4のようになる。左側の親の回答から検討しよう。貧困世帯では、86%の親は家庭の暮らしは総合的にみて「大変苦しい」か「苦しい」のいずれかと答えている。貧困でない世帯では、2つの「苦しい」の合計は、44%と半分ほどである。「ゆとりがある」と答えた比率は、貧困世帯の親ではほとんど存在しないが、貧困でない世帯では12%ほどいる。

子どもの目から見た家庭の経済状態などはどのようなものだろうか。「家の暮らし向き」についての質問（図IV-1-4右側）では、貧困世帯の子どもの47%が「苦しい」と答えており、非貧困世帯の子の回答（19%）を大きく上回っている。しかし、親の回答では、貧困世帯の親の8割が「苦しい」と認識しており、親の見方に比べると子どもはより楽観的に考えているのか、あるいは家の本当の経済状況を正確に把握していないのかもしれない。親が「苦しい」と回答している貧困世帯のうち、子ども「苦しい」と回答している世帯はほぼ半分の53%であり、残りの47%が「普通」か「ゆとりがある」と認識している。逆に子どもが「苦しい」と回答している貧困世帯では、親が「普通」「ゆとりがある」と回答していることはほとんどない。



子どもが「必要なものが買えなくて困ったことがある」と回答した比率は、貧困家庭の49%に対して非貧困家庭では40%とわずかながら差がある。しかし、「無駄遣いをしないようにしている」はどちらも7割強が当てはまると回答している。「欲しいものやしたいことのためにお金を貯める」は、非貧困家庭の子どもの方が73%で貧困家庭の子どもの68%をわずかに上回る。しかし、貧困家庭の子どもはお金を貯めることができるほどお小遣いに余裕がない可能性もある。

毎日の生活の上で、「生活費が不足している」と回答している親は、貧困家庭では5割存在するのに対して、非貧困家庭では19%であり大きな開きがある。児童扶養手当（ひとり親世帯への支援）、生活保護、就学援助費のいずれかを受給している親は、貧困家庭ではほぼ半分以上に上るが、非貧困家庭では8%である。このように貧困世帯においては、経済的な基盤が脆弱であり、日常的な生活費のレベルで困窮している家庭が貧困層には少なからず存在することがわかる。

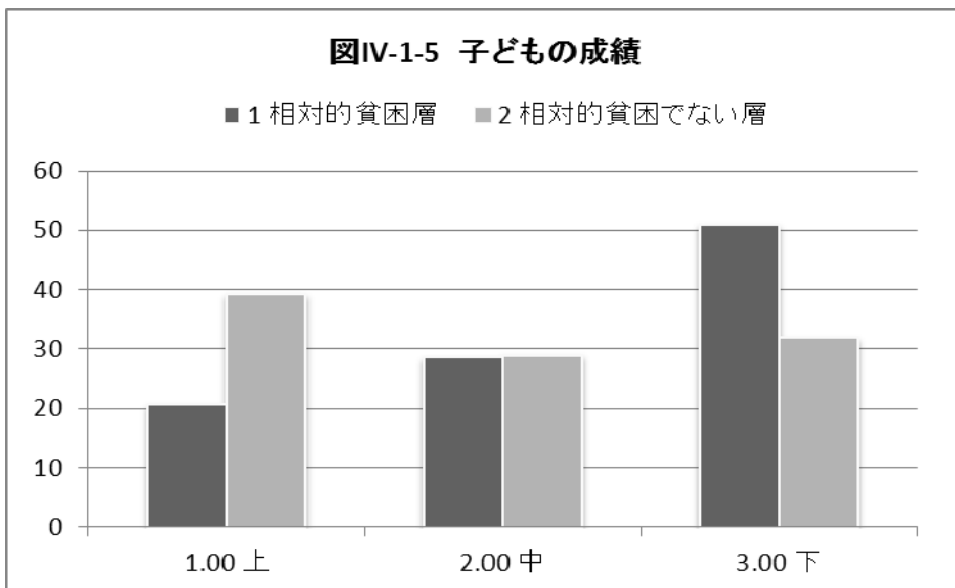
## 5 子どもの学業成績と勉強時間

ここでは学校での学業成績や授業の理解度と勉強時間といった子どもの学業に関する行動について検討する。図 IV-1-5 は学年の中での成績を子どもに自己回答してもらった結果を示した。貧困家庭の子どもは、半分が「やや下の方」か「下の方」と回答しており、「やや上の方」「上の方」は 20% となっている。これに対して貧困でない家庭の子どもは、3 割が下の方で 4 割が上の方と回答している。貧困層の子どもは、成績分布が下の方に偏っているのに対して、非貧困層の子どもの分布は上の方に偏っている。

学校の授業の理解度に関して貧困世帯の子どもと非貧困世帯の子どもを比較すると、「理解している」あるいは「だいたい理解している」の合計の比率がそれぞれ 65% と 80% となっており、貧困家庭の子どもの方がやや理解度が低いことがわかる。

勉強時間に関して貧困世帯の子どもと非貧困世帯の子どもを比較すると、週日の 1 日当たりの勉強時間が 1 時間未満の子どもが、貧困家庭では 45% に対して非貧困家庭では 26% となっており、顕著な違いがみられる。週末の 1 日当たりの勉強時間についてもまったく同様の傾向がみられ、1 時間未満の子どもが、貧困家庭では 47% に対して非貧困家庭では 28% と開きがある。

総じて子どもの学業に関してみると、貧困家庭の子どもは貧困でない家庭の子どもに比べ、勉強時間が短く、授業の理解度が低く、成績も下の方の偏る傾向があることがわかり、学業達成全般について低調である。

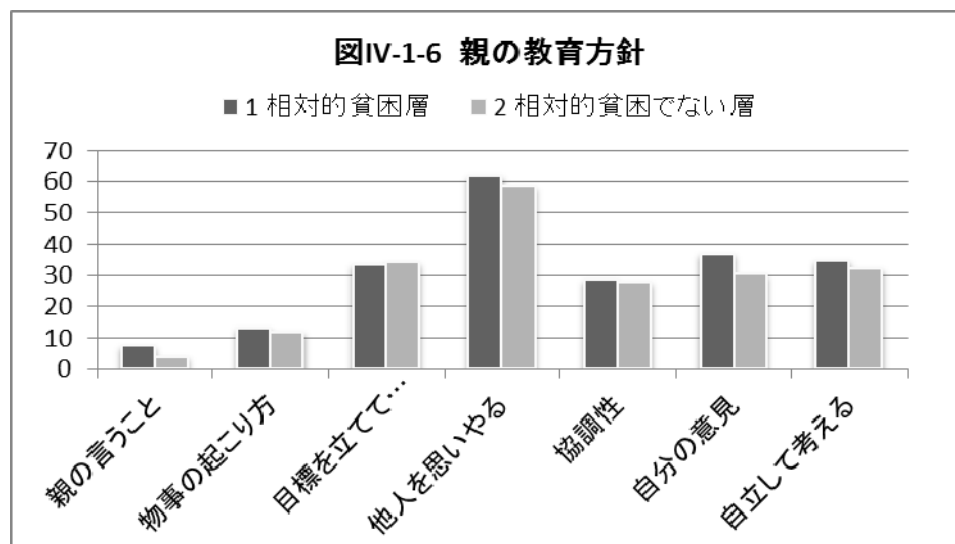


## 6 親の教育方針

子どもの教育にあたって親がどのようなことを重視しているかについて調査では質問した。図 IV-1-6 はその回答を貧困世帯と非貧困世帯別に示したものである。それぞれの項目について「非常に重視している」か「重視している」と回答した比率である。この図からわかる最も重要なことは、貧困家庭と貧困でない家庭で親の教育方針の違いはほとんど認められない、という点である。

「親の言うことに従う」を重視している回答者は貧困家庭か否かにかかわらずほとんどいない。「物事がどのように起こるかについて興味をもつこと」は 1 割ほどの親が重視している。「目標を立てて努

力すること」は3分の1の親が重視する。最も重視されている項目は、「他人を思いやること」で、ほぼ6割の親が賛成している。「自分の意見をはっきり言えること」については、貧困家庭の親の37%が重視しており、この比率は貧困でない家庭の親の比率（30%）より有意に高い。しかし、他の項目については、貧困家庭か否かは教育方針の違いとまったく関連しておらず、家庭の経済的な状況が家庭の教育方針の違いを生み出していないことがわかる。



## 7 親子の関係

親子関係をみるひとつの指標として、子どもが家庭の雰囲気をごどのように考えているかをまず検討した。家庭の雰囲気が、「あたたかい」か「どちらかと言えばあたたかい」と回答した子どもの比率は、貧困家庭、非貧困家庭の双方でほぼ9割となっている。大多数の子どもは世帯の貧困状況にかかわらず、家庭は暖かい雰囲気があると認識している。

次に具体的な親子関係の指標として父親・母親との会話の頻度を取り上げる<sup>1</sup>。父親と学校の出来事、友だちのことについて話をする（「よく話をする」と「ときどき話をする」の合計）割合は、それぞれ5割と4割で、貧困家庭か否かで有意な差はみられない。しかし、父親と勉強や成績のこと、進路や将来のことについて話をする割合は、貧困家庭の方が非貧困家庭に比べ低い。勉強や成績について話をするのは、貧困家庭で46%、非貧困家庭で61%、進路や将来のことについて父と話をするのは、貧困家庭で47%、非貧困家庭で56%となっている。

母親との会話は、父親と比較した場合より頻繁に行われている。友だちのことについて母親と話をする子どもは、貧困家庭か否かにかかわらず、74%と高い。学校の出来事について母親と話をする子どもは8割ほどで、これについても貧困家庭か否かで違いはない。勉強や成績についての母との会話に関しては、父親の場合と同様に、貧困家庭（74%）での会話の頻度は貧困でない家庭（85%）に比べ10%ほど少ないことがわかる。将来や進路のことに関する母親との会話では、貧困家庭か否かで有意な違いがなく、8割弱の子どもが話をしている。

最後に、子どもとの関係が良いかどうかについての親に対する質問を検討すると、関係が「良い」か「どちらかと言えば良い」と回答した親の比率は、貧困家庭で73%、貧困でない家庭で76%と有意な

<sup>1</sup> 父親または母親がいない場合、無回答であった場合には分析から除いた。

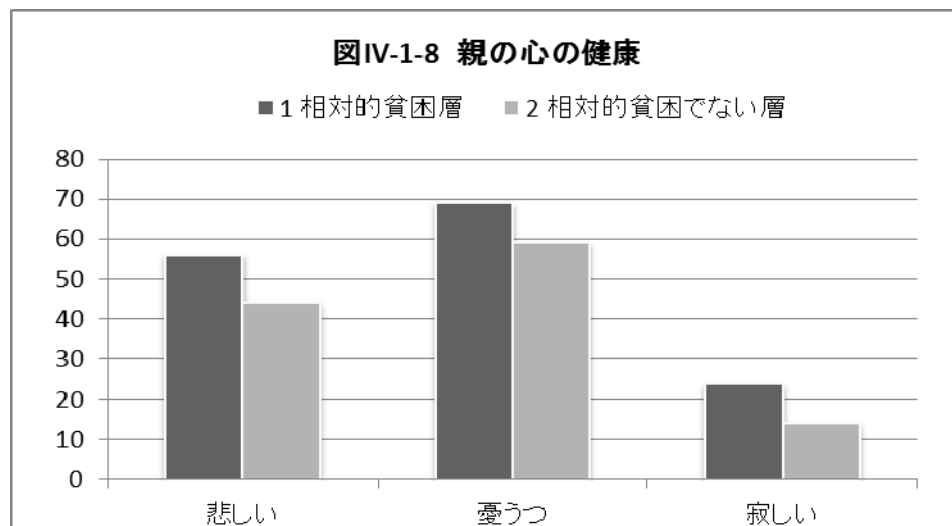
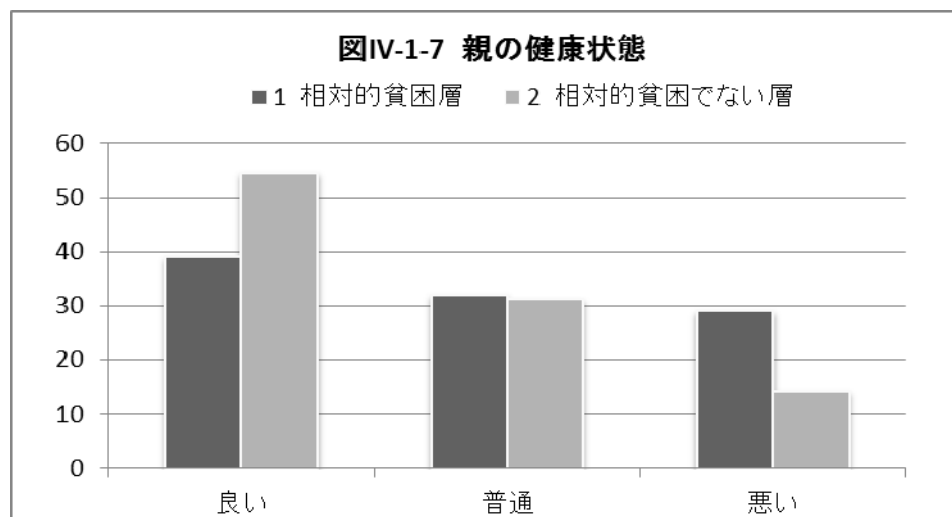
違いがみられず、4分の3ほどの家庭が良好な関係を築いていると考えている。

親子の関係についてまとめると、貧困世帯の子どもと貧困でない世帯の子どもの間で、それほど明確な相違点は見られない。あえて違いを強調するとすれば、勉強や成績のことについての父母双方との会話が、貧困でない世帯ではより頻繁に行われているという点であろう。このことは、勉強や成績に関しての親の励ましや期待（あるいは子どもの目から見れば干渉）が貧困世帯では相対的に弱く、結果として学業達成全般について貧困世帯の子どもが不利な立場に立っていることと関連しているのかもしれない。

## 8 親子の健康状態と子どもの生活習慣

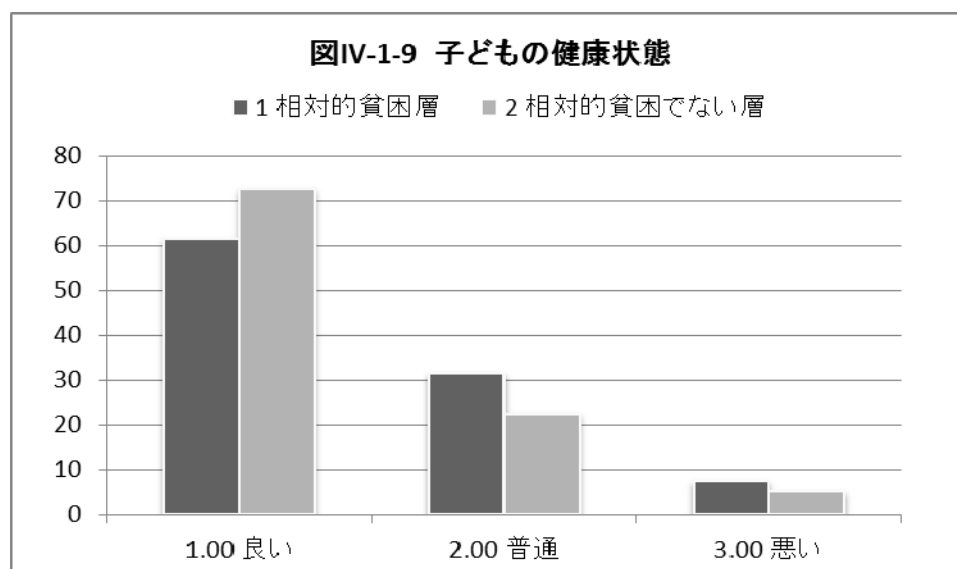
健康度は、貧困問題を考える際のひとつの重要な視点である。もし貧困世帯と非貧困世帯との間で健康度に関して顕著な違いがあるのであれば、経済的格差と健康格差の関連がみられることになる。特に、貧困家庭に育つ子どもたちの健康状態がそれ以外の家庭の子どもたちと異なるのであれば、家庭の経済状況がそこで育つ子どもの健康と将来にわたって長期的な負の影響があることが懸念される。

図 IV-1-7 は、親の健康状態の違いを示した。貧困世帯の親の 29%は普段の健康状態が悪いと回答しており、貧困でない世帯の 14%の倍の比率となっている。「普通」の比率に差はないが、「良い」の回答は貧困以外の世帯では 55%と半分以上であるのに対して、貧困世帯では 39%となっている。



心の健康度の比較を示したのが図 IV-1-8 である。調査時の 1 週間に「悲しいと感じたこと」「憂うつだと感じたこと」「一人ぼっちで寂しいと感じたこと」を経験した比率は、貧困世帯ではそれぞれ 56%、69%、24%となっている。貧困ではない世帯では、比率はそれぞれ 44%、59%、14%であり、10%ほどの差があることがわかる。貧困世帯の場合、そこに暮らす親の健康状態は、貧困でない世帯の親に比べ総合的な健康状態と心の健康の双方で相対的に良くないことが明らかである。

それでは子どもの健康度はどうであろうか。図 IV-1-9 は、子どもの健康状態の違いを示した。普段の健康状態が「悪い」子どもの比率は、貧困家庭では 7%、非貧困家庭では 5%とごく少数であり比率にほとんど差は見られない。しかし、健康状態が「良い」と回答した子どもの比率は、貧困家庭で 61%、非貧困家庭で 73%と明らかに差がみられる。その分、貧困家庭の子どもは健康状態が「普通」の比率（31%）が非貧困家庭の子ども（22%）に比べて高い。親の健康状態では、貧困世帯では「悪い」比率が明らかに高かったが、子どもの健康状態では、このような違いがみられない。しかし、健康状態が「良い」比率は、親も子どもも貧困家庭で低い傾向が確認された。



子どもの心の健康についてみると、この一週間に「悲しいと感じたこと」「憂うつだと感じたこと」の経験については、貧困家庭の子どもと非貧困家庭の子どもに違いはまったくみられない。「一人ぼっちで寂しいと感じたこと」は、貧困家庭の子どもで 79%が「まったくなかった」と答えているのに対して貧困でない家庭の子どもは 85%が「まったくなかった」と回答している。どちらもほぼ 8 割は寂しい経験はなかったとしており、わずかな違いしかみられない<sup>2</sup>。ひとり親世帯で貧困が比較的多くみられる傾向を考慮すると、学校から戻った時に家に誰もいない可能性が高いことが回答に影響を与えているのかもしれない。

健康度と関連した生活習慣について検討すると、朝食を毎日食べるのは貧困家庭の子どもが 79%で、貧困でない家庭の子どもの 84%と比較するとわずかに低い。どちらの家庭でもほぼ 8 割が朝食をとっていることがわかる。歯磨きについてみると、1 日 2 回以上歯磨きをするのが、貧困家庭の子どもで

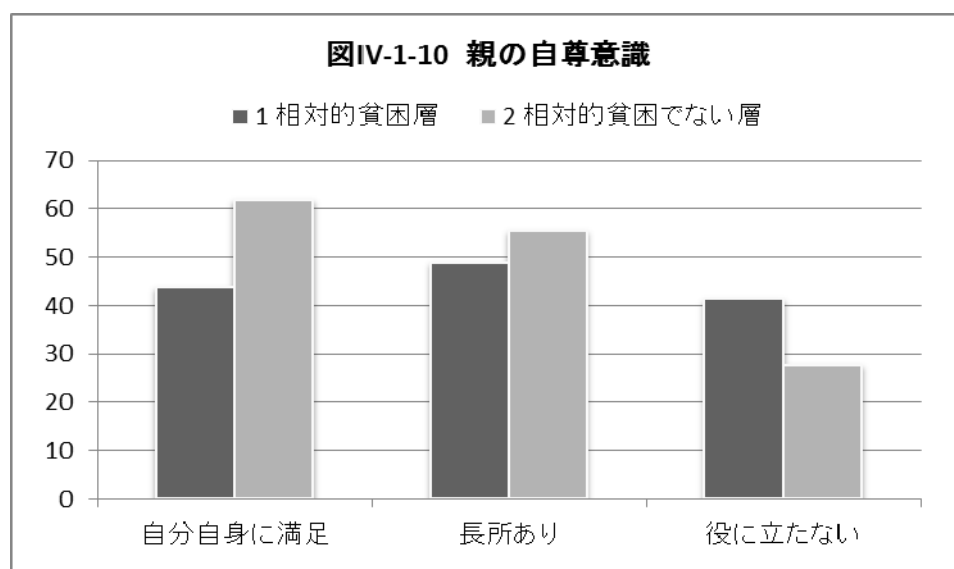
<sup>2</sup> 稲葉論文では、この 3 つの項目から抑うつスケールを作成し分析している。女子の方が男子よりも抑うつスケールの平均値が高く、世帯収入が低い方が抑うつスコアが高いことが報告されている。

61%、貧困でない家庭の子どもで 69%と、朝食同様わずかな違いがみられるが、1日1回以上も含めると貧困と非貧困家庭の違いはほとんどない。就寝時刻については、平日夜 12 時以降に寝る比率は、貧困家庭で 30%に対し非貧困家庭では 35%で、貧困でない家庭の子どもの方に就寝時刻が遅い傾向が観察される。これは勉強などが忙しく就寝時間が遅くなる傾向にあるのかもしれない。

健康度についての分析をまとめると、子どもの総合的な健康状態と心の健康に関しては、貧困世帯と非貧困世帯の間で大きな違いはまったくみられない。違いがみられるのは、親の方の健康度であり、貧困世帯の親は非貧困世帯の親と比較すると、物理的・心理的健康状態が悪い傾向がある。

## 9 親の意識

親の自尊感情意識の違いについて検討したのが、図 IV-1-10 である。「自分自身に満足」している、「自分には長所がある」と思っている回答者の比率は、貧困世帯の親の方が貧困でない世帯の親よりも有意に低いことがわかる。逆に「自分は役に立たないと強く感じることもある」回答者の比率は、貧困世帯では 4 割以上であるのに対して、貧困でない世帯では 28%であることがわかる。自尊意識は、貧困世帯の親で有意に低い。



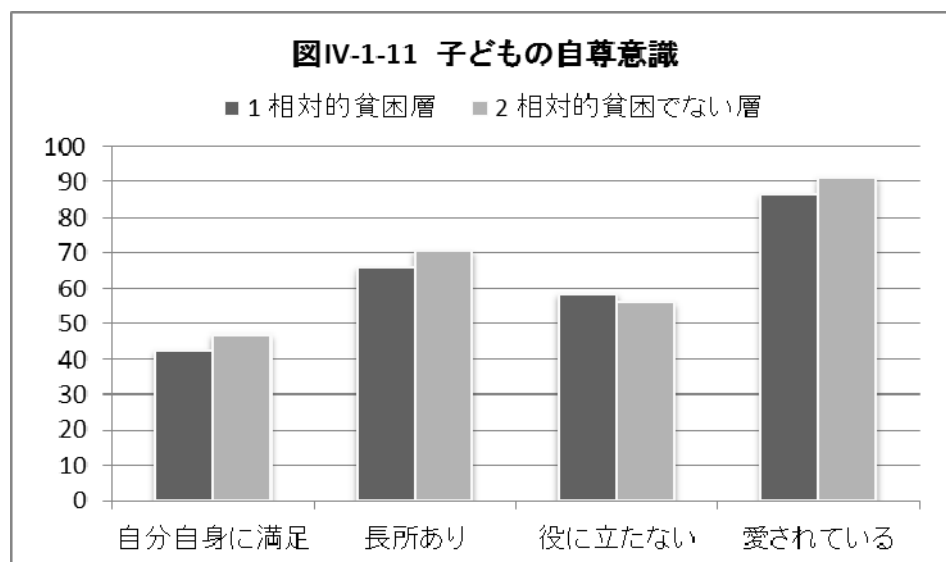
しかし、その他の意識では有意な違いがみられないものもかなりある。「将来のために節約・努力するよりも、今の自分の人生を楽しむほうがよい」という意見に対して、貧困世帯と非貧困世帯にかかわらずほぼ 3 分の 1 が賛成である。「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分業の考え方に対しては、4 分の 1 が賛成で世帯が貧困であるか否かで違いは見られない。「十分な収入がなければ、結婚すべきではない」という意見に対しては、ほぼ半数の回答者が貧困世帯か否かにかかわらず賛成している。

## 10 子どもの意識

子どもの自尊感情の違いを分析したのが、図 IV-1-11 である。この図の最も重要な点は、親の自尊意識の分布と異なり、子どもの自尊意識に関しては、貧困家庭と貧困でない家庭の間に大きな違いがみら



れないことである。「親から愛されている」と思っている回答者の比率は、貧困家庭の子どもで 86%、貧困でない家庭の子どもで 90%とわずかに貧困家庭の子どもが低い。違いは統計的に有意ではあるが、実質的には大きな違いはない、とみるのが妥当であろう。他の項目については 1%の水準で統計的に有意な違いはなく、実質的にも数パーセントの違いであり、貧困家庭の子どもの自尊意識が明らかに低いということは確認されない。

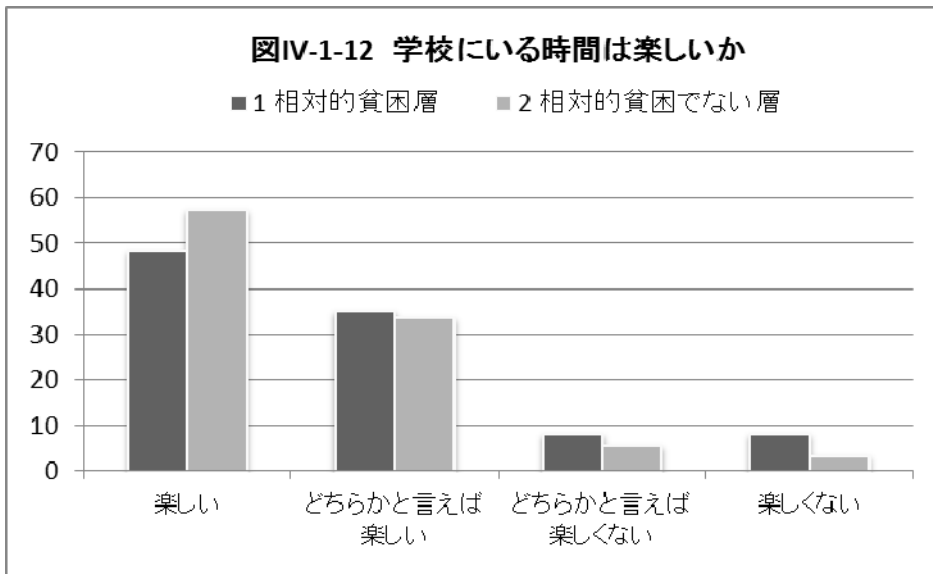


自尊感情以外の子どもの意識について、貧困家庭の子どもと貧困でない家庭の子どもの間で差があるかを調べるため、下記の意識項目について違いを確認した。

- 「A 将来のために節約・努力するよりも、今の自分の人生を楽しむほうがよい」
- 「B 今の社会は、貧しい人と豊かな人の差が大きい」
- 「C 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」
- 「D 十分な収入がなければ、結婚はすべきではない」
- 「E 希望する仕事でなければ無理につかなくてよい」
- 「F 努力すれば夢や希望は実現する」
- 「G 親の意見にはできる限り従うべきだ」

これらすべての意見について、貧困家庭と貧困でない家庭の子どもの間に（1%水準で）有意な違いは見られなかった。

最後に学校にいる時間が楽しいかという質問についての分布をみたのが図 IV-1-12 である。貧困家庭の子どもの 49%が「楽しい」を選択しており、「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」を合計すると 83%である。貧困でない家庭の子どもの比率は、それぞれ 58%と 91%であり、わずかに高い。この違いは統計的に有意である。しかし、8割以上の貧困家庭の子どもは学校を楽しく感じており、貧困家庭か否かによる違いは、それほど大きいとは言えない。友だちづきあいについての質問についても、貧困家庭の子どもの 88%、貧困でない家庭の子どもの 89%が「何でも話せる友だちがいる」と回答しており、家庭の経済状況が友人関係に影響を与えているとは言えない。



子どもの意識の分析をまとめると、ほとんどの意識項目において貧困家庭の子どもと貧困でない家庭の子どもの間には有意な違いは認められない。このことは、家庭の経済的な状況が、そこで育った子どもたちの意識や考え方に直接反映されているような事態は考えにくいと推察することができる。

## 1 1 結語

本章では、相対的な貧困を定義し、相対的貧困世帯を特定することにより、貧困世帯と貧困でない世帯の間の違いについて検討してきた。いくつかの興味深い知見が分析から明らかになった。第1に、貧困世帯は、世帯類型別にみるとひとり親世帯、特に母子世帯で出現率が高い。第2に、経済状況からみると、貧困世帯は貧困でない世帯と比較して、明確に不利な状況におかれている。主観的な家の暮らし向きだけでなく、生活費の不足など経済基盤が脆弱な家庭の比率が貧困世帯では明らかに高い。

第3に、子どもの学業達成も貧困世帯と非貧困世帯では異なる。貧困家庭の子どもは非貧困家庭の子どもと比較すると、学校での成績は下の方に偏る傾向があり、授業の理解度が低く、学校の授業以外の勉強時間も短い。塾などの学校外の習い事に子どもが通う比率が貧困家庭では低いことを考慮すると、学校での勉強を補完するような教育に投資することが経済面からみて難しいことが影響しているのかもしれない。また両親と子どもの勉強や成績のことについての会話が、貧困世帯では非貧困家庭よりも少ないことが明らかになっており、勉強や成績に関しての親の励ましや期待（あるいは子どもの目から見れば干渉）が貧困世帯では相対的に弱く、結果として学業達成全般について貧困世帯の子どもが不利な立場に立っていることと関連しているのかもしれない。

第4に、親の健康、親の自尊感情について、家庭の経済状況との相関がみられた。貧困世帯の親は、総合的な健康度と心の健康の双方で、貧困でない世帯の親に比べ良くないことが明らかであった。しかし、親子関係と親の教育方針に関しては、家庭の経済状況で大きな違いはみられなかった。子どもが考える家庭の暖かさ、両親との会話の頻度などでは、貧困世帯であるか否かで顕著な差がみられなかった。親の教育方針についても、すべての家庭で「他人を思いやること」「目標を立てて努力すること」が重視され、「親の言うことに従うこと」は重視されない傾向にあり、家庭の経済状況による差異は確認されなかった。

第5に、子どもの健康状態、意識や考え方に目を向けると、出身家庭の経済状況で大きな差は見られなかった。自分の全般的な健康状態が「良い」と答えた子どもの比率は、貧困家庭ではやや低いものの、心の健康度について低い傾向はなかった<sup>3</sup>。自尊感情、社会や将来に対する意見など子どもの意識や考え方では、ほぼすべての項目について家庭の経済状況による明確な格差は確認されなかった。

家庭の経済的な環境は、親の健康や自尊感情などに対しては明らかな影響を与えている知見が確認されたのに比べて、子どもの意識に対しては明確な影響を与えているとは分析結果から結論することができなかった。子どもの意識には格差がみられないにもかかわらず、学業達成や将来の学歴達成に関して明確な違いが貧困家庭と非貧困家庭の間に存在するのは、経済的資源の少なさが塾などの学校外教育への投資の阻害要因となっていることが推察される。さらに日本の高等教育進学が家計に大きく依存しており、返還義務のない奨学金もほとんどない状況で、出身家庭の経済資源の希少さが子どもの進学行動を押しとどめることにつながっていると考えられる。

---

<sup>3</sup> 稲葉論文では、女子の場合については、抑うつスコアと世帯所得の関連が指摘されている。